

【論文】 サードプレイスとしての祭

—祭にみるインフォーマルなつながりとコミュニケーション基盤の再考—

遠藤 由起
日本大学大学院総合社会情報研究科

Festivals in Japan as The Third Place

—Neutrality bases of informal connection and leveled communications among the diversity people—

YUKI Endou
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Japanese festivals are thought to have various functions and effectiveness to the people and society through the festival. Some of these features are common to “The Third Place” according to Ray Oldenburg. “The Third Place” is a place that serves as a core environment for informal public life. Home is “The First Place”, and workplace or office is the “Second Place”. Such a “The Third Place” has important meaning in a modern society where the connection between people is diluted and has the potential to be an indispensable place for other institutions and organization or groups.

The global epidemic of infectious diseases has forced people’s lives to become isolated since it has been required to adjust in new lifestyles and connections with people and society.

The value of the Festivals in Japan as the culture is not only to diverse people to gather and enjoy. There is a possibility that the connection between people and society through the festival can demonstrate a great deal of power to support the mutual system not only in daily life but also emergencies and disasters. In this paper takes up the function and role of the connection between people and society through Japanese festivals and festivals together with the unique feature of “The Third Place” exchange and leveled connection.

1.はじめに

現代社会では、人類はこれまでに経験したことのない数々の社会問題を抱えているといっても過言ではないだろう。新型コロナウイルスによる世界的な感染拡大といった同時代の危機状況、あるいは過疎化を主な要因とする地域コミュニティの変容と維持の問題などは地球規模あるいは社会規模で対策を講じ、解決することが求められている。このような社会問題には、孤立を余儀なくされたり、人と人とのつながりを欠くことによりその問題と深刻さが増幅されうるという看過できない共通点が認められる。また 2020 年現在、いまだ地球規模での感染拡大が終息の兆しをみせてない新型コロナウイルスの感染拡大の問題は、社会にある格差や差別という人類にと

って未解決なままの課題を一層浮き彫りにしたともいわれている。これらの問題は、人類にとって古くて新しい課題を再考するきっかけを与えているといは言えないだろうか。

本稿では、社会における人々の間のつながりの重要性和効果という視点から、現代の社会的諸問題に対して人々や社会の間のつながりがどのように寄与できるのか考察を試みる。ここでは特に、日本の祭を通して認められるインフォーマルなつながりとコミュニケーションの基盤を醸成する場の意義を中心に取り上げる。そこで、アメリカの社会学者であるレイ・オルデンバーグが提案している「サードプレイス」[オルデンバーグ 1989 : 17]という概念を援用し、祭にみられるインフォーマルなつながり方とそ

の重要性、効果等を再考する。それは、現代においては社会やコミュニティの中で多様な背景の人々を受け入れ、かつ柔軟であるようなつながり方が、社会に顕在化する諸問題に対して有効かつ不可欠であると考えられるからである。このように重要で不可欠であるにも関わらず、サードプレイスあるいは日本の祭に認められる多様な人々の受け入れ方や、柔軟でありながら継続的なつながり方は、現代社会の場面では決して多いとはいえない。このようなつながり方とは対極の要素を持った社会関係が、一面では現代の経済活動や生活を支えてきたからである。しかし、現代社会における諸問題の顕在化のみならず、人々が生活をしていくうえでも、いわゆる先進地域の多くの人々はすでに、多様さを受け入れ、緩やかでも継続できるようなつながり方こそが未来の持続可能な社会を支えることを強く認識しているともいえる。そのことはサードプレイスに認められる場所、例えばオルデンバーグが挙げているイギリスのバーやコーヒーショップであるとか、日本においては地域におけるサードプレイス創造の取り組み[石山 2019 : 10]などに様々な背景を持つ多くの人々が集い、柔軟に支え合えるような関係を作り出していることから確認できる。

また、このようなインフォーマルな場所あるいはそこで生まれるインフォーマルなつながりである一方、コミュニティにおいてはフォーマルな集団や組織にも接続させるようなつながり方を、一人ひとりの個人が意識的に作り出して育むことで成立していくという側面も有している。既存のつながりに参加し、やがてはそれを醸成していく主体になる過程で、人々は様々な課題や社会問題に対処する術を身につけ、またそのような人々の間の結束が多くの課題に対する解決をもたらすことになると考えられる。こうした諸問題や課題に対処する仕方は、かつての日本社会では、各世代が共存し支えあって暮らしてきたコミュニティにおいていわば自然に培われていた現象であった。しかし社会構造の変化に伴い、地域コミュニティの構成や各家庭の生業などが変容してくると、コミュニティ内での各世代間の支え合い方も変化し始めた。地域コミュニティにおける様々な事業や活動の基盤となる社会関係資本もまた、変

容を促され、維持と継承の課題が見え始めた。地域コミュニティにおける重要な社会関係資本[稲葉 2019 : 253-254]、文化資本である日本の祭は、現在はその意義を大きく問い直されているといえる。そこで焦点を当てたいのは、日本の祭と祭の育む人々の間のつながりが社会の危機的状況、例えば災害や震災からの復興やコミュニティの再生にいかに関与してきたかという点である。筆者はいくつかのフィールド調査から、日本の祭が社会問題に寄与できる重要な機能として、祭を通して培われる世代や地域を超えたインフォーマルで柔軟な、かつ多様な背景の人々を受け入れうる素地をもつ祭特有のつながり方を見てきた。そこでは、インフォーマルなつながり方が、人々や社会の間に存在する境界線を作り替え、あるいははずらし、人々や社会を緩やかながらも柔軟に結びつけることを可能にしている。オルデンバーグのいうサードプレイスの価値と、日本の祭が育む人々や社会の間のつながりには大きく共通する要素や価値がある。

新たな感染症拡大の予防対策において、世界中で多数の人々の集まりが制限され、遠隔での孤独な社会的生活が強いられる時間にこそ、インフォーマルなつながりは新たな重要性を帯びてくるといえる。物理的な距離は意味をなさなくなったグローバル社会においては、いわば逆説的に身近に接する人たちとの関係のあり方が見直され始めた。私たち人間の誰一人として、フォーマルであろうとインフォーマルであろうと、人と人、社会と人との間のつながりや支え合いを欠いては、生きていくことができないということを、現代ほど痛感させられる時代はないのではないだろうか。新型コロナウイルスの感染拡大という状況に際し、様々な課題や問題が訴えられている中で、地域活性化コンサルタントの水津陽子は、全労済が実施した調査で「これからの社会に助け合いが必要だと思う」と回答した人が90.2%に上ると述べている[水津 2020 : 18]。また、アフターコロナの社会では、いざというときに助け合える人とのつながりや地域の絆の必要性があることを論じ、たくさんのつながりと支えのある社会の例[水津 2020 : 140-145]を提案している。

以下、まずは日本の祭にみられるつながりと大き

な共通点を持つと考えられる「サードプレイス」についての定義をみていく。次にその2つに共通する重要な要素から、サードプレイスの意義と日本の祭のもたらすつながりがいかなるものであり、どのような機能や効果があるのか検証、考察する。次に、サードプレイスの重要な特徴である「中立性」「中間地点」という役割に着目し、日本の祭にみられる中立性、中間地点の意義と役割について「なかだち(娯)」¹という概念をもとに探る。そして、日本文化の基盤になっていると考えられる祭と、祭に認められるつながり方について、サードプレイスと共通する機能や効果をもとに現代的な意義を検証する。最後に、サードプレイスと日本の祭に共通する重要な機能や効果は、現代社会における諸問題や同時代的な課題に際し、いかに寄与しうるか考察を試みる。

2.オルデンバーグによる「サードプレイス」の定義

サードプレイスという言葉は、1989年にレイ・オルデンバーグが提唱した家庭(第1の場)でも職場(第2の場)でもない「第3の居場所」という概念を指す[オルデンバーグ 1989: 59]。それはあらゆる人を受け入れて、地元密着な場である限り、最もコミュニティのためになるという、「インフォーマルな公共の場」[オルデンバーグ 1989: 17]である。アメリカの都市社会学者であるオルデンバーグは、インフォーマルな公共の場、一見関係のない人同士が集いみんなで楽しく過ごすことができる地域の「第3の場」の重要性を指摘した。そのような場所にある目的や機能は、他のいかなる機関であっても提供できない。次に重要なことは、「世界のすぐれた文化は生き活きとした公共生活を営み、必然的に庶民の憩いの場を発達させてきた」[オルデンバーグ 1989: 5-6]という点である。オルデンバーグはサードプレイスを「インフォーマルな公共生活の中核的環境」と表現し、家庭と仕事の領域を超えた個人、定期的で自発的なインフォーマルな、お楽しみの集いのために場を提供するさまざまな公共の場所の総称[オルデンバーグ 1989: 70]と定義している。また彼が挙げているサードプレイスの代表例中にはバーや地域のレストランなど、不特定多数の人々を受け入

れ、かつ人々が集まることが大きな意味を持つ場所が多い。そしてそれらの場所は「会話、コミュニケーション」がその重要な目的となって集う場所とされる。サードプレイスの重要性は日本でも多くの人たちが語っているところであるが、地域の街づくり、施設づくりを手掛ける国分裕正は、サードプレイスの本質は「相互に交流できる」[国分 2019: 103]というところにあるとしている。オルデンバーグが取り上げるサードプレイスの例は、アメリカの都市問題やイギリス社会の伝統的な文化発祥と深く関連している。そのため、このケースをそのまま日本社会や日本文化のケースに当てはめることはできない。しかしながら、現代社会はすでに都市化や情報化などのスピードが加速しつつあり、人と人、人と社会のつながりの希薄化が社会問題化して久しい。このような現代においては、第3の場という目的と意味を提供する場所における交流や、それらの交流を通じたつながりは、人や社会の間の関わりを欠いては決して生存できない人間にとって、普遍的に重要で価値のあるものといえよう。

さて、サードプレイスには次の8つの特徴が挙げられる。それは1 中立性、2 社会的平等性の担保、3 会話が中心に存在すること、4 利便性があること、5 常連の存在、6 目立たないこと、7 遊び心があること、8 感情の共有ができるもう一つの我が家、の8つであるとされる。これらはとりもなおさず、人々が気軽に交流することが出来て、かつ多様で異質とされるどのような人々も社会的な立場を気にすることなく憩い、交流しうる場所[石山 2019: 11]であるということを意味する。

次に、オルデンバーグはサードプレイスの具体例として主に彼のフィールドであるアメリカの居酒屋、メインストリート、イギリス社会におけるパブ、フランスのカフェ、コーヒーハウスなどを挙げている。アジアや日本社会の事例では、オルデンバーグのいうサードプレイスの特徴を満たすような場所はこれまであまり確認されてこなかったが、この現代に必要な不可欠な場所の価値を明らかにするためにも、日本社会におけるサードプレイスの可能性を持った場所やつながりを検討することには十分にその意義を認めることができるものと思われる。

本稿では、現代社会で顕在化した問題に関連して、人や社会の間のつながりという点に着目する。その上で、上述したようなサードプレイスの特徴であるコミュニケーション、中立性、社会的平等の担保などの諸特徴に焦点を当て、日本の祭との共通性やつながりとの関連、有用性などについてみていく。

3.日本の祭とサードプレイスの共通点

次に、人々や社会とのつながりという視点からサードプレイスの特徴であるコミュニケーション、中立性、社会的平等の担保、感情の共有といった特徴に注目し、日本の祭と共通点を探り、それらの有用性を再検討する。

先述のように人類社会でみられる社会的格差や偏見から生じる差別といった問題は、いまだ決定的な解決を見ないまま残された課題となって現代に引き継がれている。例えば、地域や性別、年齢などの違いから本来なら誰もが等しく受けるべきサービスや待遇に差が生じるとか、正しい知識と理解の不足によっていわれのない差別を受ける、といった問題である。この古くも新しい課題は、新型コロナウイルスという人類にとっての新たな脅威が引き起こした世界的な感染拡大によって、社会問題と関連し一層顕在化した。この人類社会に存在する格差や偏見、差別をどう乗り越えるか、これまでも様々な議論や提案がなされ、取り組まれてきた。今回、感染症の拡大とそれにまつわる医療崩壊や政策策定の困難さなどが世界的にも深刻さを極めている現状がある。その中で人々は新たなウィルスとの共存を図る生活のあり方を巡って、歴史の教訓から学びつつ、新たなワクチンの開発と普及に取り組むなど、それぞれの立場でできることを行ないながら、危機を乗り越えようと努めている。

これまでもこれらの問題は人類が未解決のまま継続させてきた課題であった。しかし、世界的な感染症の拡大という同時代の問題によって、これらの社会問題が一層明確化され、そのことが人類社会を深刻な局面に向かわせてはいないかという懸念が残る。2020年10月にオンライン会議の形式で実施された日本文化人類学会と日本学術会議の公開シンポジウム²では、コロナ禍を受けて格差や差別の存在を認識

し、その上でこれらを乗り越えていくために一人ひとりにできること、なすべきことは何であるかが議論された。その捉え方は大まかに2つあり、それをさらに2つの方向に分けることができる。まず1.「違う(同じ)であることの確認」、2.「違いとともに生きる」、という2つの見方ができるとして、現状から考えて2.「違いと「ともに」生きる」こと、がとるべき方向であろうというのがその提言であった。そして2.の見方はさらに2つの方法に分けられる。1つは法律や知識など「唯一絶対」の正解に従うという方向性、2つめには相互の「不完全性」を承認しつつ進んでいく、という方向性である。この2つは、状況に応じてどちらも必要な対処法であるといえよう。さらにいうと、1つめの唯一絶対の正解というのは、おそらく時代や状況が進展してくるに従って限界が出てくる方向性である。あるケースではあてはまっても、時代や環境、見方が変わるとそこから逸れるケースが必ず生じてくるものだからである。そこで唯一絶対にそぐわないものはすべて否定してしまうのかというと、そのような方法は歴史が証明してきたように、不毛の争いを生み、人類の発展を様々な側面から阻害する障壁となることが多い。多様性をもって成り立っている地球上の各現象を、1つの枠組みの見方に閉じ込めることは真実を見誤ることにもなりかねない。公開シンポジウムの総意と提言は、最終的には差異の中で絶対の正解だけに固執することなく、違いや差異を受け入れ、認めうることは認め、そして相互の「不完全性」を承認しながら共に歩いていくということが、最も建設的かつ実効性のある方法だという意見にまとめられた。日本文化人類学会としては、厳しい見方をすると「with コロナ=新型コロナウイルス感染症とそれに伴う社会的な問題とともに(より良い生活を目指して)生活していく」といえる段階には現時点では至っていない」というのがその見解であった³。

現状の課題に疲弊し麻痺してしまうことと、現状の課題や対策を認識したうえで、改善に向けてできる限りのことをしていくということでは、その後のあり方がまったく違ってくるだろう。感染症の流行や世界的な流行拡大は、これまでの人類の長い歴史の間にも幾度となく見舞われてきた事態である。そ

して、その度に人類は新たな知恵や工夫、努力で乗り越えてきた。今回の事態でも同様に、格差や偏見、差別という歴史上で繰り返されてきた課題を含めて、新たな対応と課題への取り組みが求められているといえよう。それはまた、人類が解決できずにいる課題を再考し、解決に向けた新たな足掛かりを模索するまたとない機会であるとも捉えることができる。そしてそれは今後の「新しい生き方」にも通じているといえるだろう。

以上を踏まえ、本節では人と社会のつながりという視点を軸とし、サードプレイスと日本の祭の共通をもとに、その有用性を探してみたい。

日本における祭は、地域や日本社会にとって不可欠ともいべき人々や社会の間のつながりと絆を醸成する社会関係資本⁴であり、祭によっては地域や国を超えてその価値を認められた文化資本でもある。日本の祭は古来、日本社会の「社会的生産の基盤」[原田 2006 : 119]となった稲作との深い関連をもって発達してきた。つまり「日本の祭の原点は稲作文化にある」[松下 2010 : 66]とされる。また、民俗学者の柳田國男は、「酒食を以て神を御もてなし申す間、一同が御前に侍坐することが「マツリ」であった」[柳田 1942 : 219]と論じている。

日本社会や日本人にとって特別な意味と価値づけをなされてきた稲作という産業は、祭の儀式で五穀豊穰を祈願し、祭によってコミュニティの形成や維持を図るといった一つの日本文化のあり方を生み出した。このような意味でも、祭は日本社会や日本文化の基層となり、いたるところに根付いている[倉林 1980 : 7]といえる。そのことはまた日本の祭ならではの人々と社会、人々と神との間の結びつきやつながりを構築、形成している。また、日本の祭には様々な機能が認められるが、中でもコミュニケーションを促進する、あるいは人と人のコミュニケーション能力を醸成する、という機能は特筆することができるだろう。例えば、倉林正司は祭の中の「饗宴」は心の広場としてのコミュニケーションの場を提供している」[倉林 1975 : 228]として、祭の現代的な意義を力説する。また、その「饗宴」であるところの「直会」も「元来は祭に関わる全ての者が、これにあずかることができるというのが本来の形であった」[倉

林 1975 : 145]としている。祭に見られるコミュニケーションの代表的な場である直会には、サードプレイスと共通する一種の平等化が確保されてきたことがわかる。松下彰信は、これほど多様なツールが発達してきているにもかかわらず、「現代人はコミュニケーション能力が低下している」[松下 2010 : 67-68]と述べる。平等化の確保されたコミュニケーションの場としても、祭はその意義と効用を発揮しうるといえるだろう。

ここでは特に日本の祭とサードプレイスの大きな共通点として、社会的平等性の担保とコミュニケーションが中核にある、という点に着目する。この特徴は、インフォーマルからフォーマルな場面までを包括した人や社会の間の柔軟なつながり、世代や異質なもの同士を、違いを乗り越えて、結びつきを新たに作り変えるということに通じてくる。そしてこれらは詳しくは次節で述べるが、サードプレイスの一つの重要な特徴である「中立性」に支えられており、自発的に他者と触れ合うための機会と働きかけを促すことにもなるものである。社会的平等性の担保という点は、第1の場である家庭や第2の場である職場とは異なる空間であり、それらの場所で築かれるのとは異なる人間関係を構築しうるサードプレイスならではの特徴の一つといえる。そしてそれはそれらの場所で求められる役割や身分からの解放という意味でも重要である。平等化の見返りとして、人々はより人情味があって長続きする場所に受け入れられる。人はありのままの自分で認められ、経済や政治の浮き沈みに左右されることもない。誰にでも等しく門戸が開かれるサードプレイスでは、「当人の人柄や雰囲気はものをいう」[オルデンバーグ 1989 : 70]のである。そのような場所で築かれた人間関係やつながりは、普段の生活で作られる避けられない人間関係とは異質のものであろう。生業に関する生活面では人間関係を選択できることが少ないのに対し、サードプレイスの関わりは「自発的」というところに大きな力点が置かれる。しかもその人間関係は外の身分上下、役割を棚上げした平等なものであるため、そのことが自発的に築かれた関係を長続きさせる。

日本における祭ではどうであろうか。祭は地域コ

コミュニティの中で、比較的狭い地域の人たちが中心になって実施されることが多い。しかし、祭を作っているのはそれを担う人たちだけではない。その筆頭が都市祭礼にみられる数多の観客たちである。世界文化遺産に登録されるような大きな祭などは、いまや世界各地から祭を見物するために人々が訪れる。昨今では祭を裏で支えている人たちは、地域の人にとどまらない。観客と同様に、日本全国から祭を知った人々はゆかりを通じて祭を支えるためにやって来る。外国からの参加者たちも、日本の伝統や祭文化に興味をもって楽しんで参加する。このような背景にはもちろん、過疎化や高齢化という問題によって人手不足を補うため、いふなれば地域の外から人員を確保する必要に迫られているという事情もある。しかし、祭を重要な文化資本、社会関係資本という捉え方をすると、文化資本、社会関係資本である祭がそのような多様なバッググラウンドを持つ人々によって支えられることなしに、今後も時代時代に即した形で維持されることは不可能であるといえよう。多様な人々の間で、平等な、柔軟な継続性のあるつながりがあるからこそ、文化資本、社会関係資本でもある日本の祭は続いてきたといえる。またそのように多様で柔軟な人や社会の間のつながりを、その実施と維持を通して育むことができるのも、日本の祭の大きな特徴であり、サードプレイスの特徴とともに特に現代社会にとっても重要かつ不可欠な性質と機能だということができる。

4. 中間地点、中立的な領域という役割と効果

続いて本節では、第2節で触れたサードプレイスの「中間地点」、「中立的な領域」という特徴に焦点を当てて論じていく。第2節では日本の祭とサードプレイスの大きな共通点として、社会的平等性の担保とコミュニケーションを取り上げた。そしてこれらの特徴が、個人や組織を取り巻く包摂的なつながりとして、人と社会の間のつながりを支えている。また、異なるもの同士を結び付け、あるいはすでにある結びつきを新たに作り変える役割を担っている点に触れた。

本節で注目する「中間地点」「中立的な領域」という特徴もまた、日本の祭とサードプレイスのもつ重

要な役割の大きな共通点ということができる。オルデンバーグがいうように、様々な例があげられるサードプレイスという場所そのものは「中間地点」という機能と役割を果たしている。第1節では、国分裕正がサードプレイスの本質は、「相互に交流できる」ところだとしていると述べた。国分は続けて、「人々はコミュニケーションをとり、交流するためにサードプレイスを訪れ」[国分 2019:103]、そのことが人々の集う居場所になりうるのだとしている。またコミュニケーションが比較的苦手とされる日本人にとっては、コミュニケーションのきっかけを提供してくれるような「ファシリテーター」が必要だと述べており、そのような人物は例えば「寿司屋の大将やスナックのママ的存在」[国分 2019:112]であるという。サードプレイスの特徴である「中間地点」、「中立性」を「なかだち」という視点から捉え直してみたい。そうするとここでいうファシリテーターは、いふなればサードプレイスならではのコミュニケーションを支える「なかだち」ということになるだろう。その人はまた、サードプレイスに通う人々の中の「なかだち」でもある。

一方、日本の祭において「中間地点」「中立性」とは、祭に関わる人々の中のつながりを生み出す接点、あるいはきっかけ作りをしてくれる人やモノと捉えられるのではないだろうか。祭は場所性と強く結びついていることから祭そのものが「中間地点」ということもできよう。サードプレイスの中立性についてはオルデンバーグが「豊かで多様な交流を提供できる場所」[オルデンバーグ 1989:66]と述べている。日本の祭を支える人員や観客もまた、多様な背景の人々の受け入れから成り立っていること、またコミュニケーションの代表的な場面である直会は、元来祭に関わる全ての人を対象にしていたことは第2節で述べたとおりである。

ところで本節では、日本の祭について「中間地点」、「中立性」を果たす「なかだち」という視点からみて、日本の祭を中核的に担う「おじさんたち⁵=中年層の男性たち」に焦点を当ててみたい。もともと日本の祭は女人禁制のしきたりや禁忌の形式が多く認められる。そしてそれらのルールを厳粛に守って継承されてきたという経緯をもっている。女人禁制の

しきたりや慣習形式の多くは、それぞれ儀礼上の意味があり、禁忌を破ると祭が成功しないと信じられてきたようなものから、現代的にはあまり意味をなさないものまで幅広く認められる。時代の変遷に沿って、女性の参加が認められ始めたものも多く、それはまた祭の継承のされ方を示す一つの表れとも捉えられる。女人禁制の一方で、神楽の踊り手や神饌の準備など、女性を中心に行なうことではじめて成立する祭の行事も存在する。

さて、日本の祭を長い間中核的に担ってきた「おじさんたち」であるが、最近では彼らの魅力や存在意義が日本の文化の一つとして、海外の人たちから改めて評価されている。ここでいうおじさんたちは若者ではなく、さりとて長老というほどの重鎮でもなく、会社組織であれば中間管理職あたりにいそような年齢層の人たちである。よほどのことでもなければ取り立てて目立つわけでもないが、いないと存在の大きさが知らされるような、地味だがそこに確実に根差している存在感という点でも、サードプレイスの価値に匹敵するとはいえないだろうか。そのようなおじさんたちは職業面でも現役世代にあるため、普段の生活と祭の非日常をいわば掛け持ちしつつ、普段培っている技術や人間関係を祭の非日常にあたってもいかに発揮している。このようなおじさんたちが中間的な存在だというのは、日常と非日常、あるいは若者世代と熟年世代の架け橋を担っているということを意味する。筆者は自身が居住している福島県の南会津町という小さな町で、毎年7月に行われる「田島祇園祭」においてフィールド調査を実施した⁶。そこでは、このようなおじさんたちの力が祭において、彼ら自身が楽しむ中で自然に発揮されていることが確認された。特に祭の継承という意味では、この人たちの力が非常に大きな意味をもっているように思われた。おじさんたちは自分が中間地点となって異世代間の人々をつなぎ、地域を越えた人たちをつないでいる。また祭や日常の生業にとどまらず、趣味の世界を通じて知り合った人同士のつながりから祭の運営仲間に発展した例も少なくない。祭の仲間に加わりたいきさつを聞くと驚いてしまうような異なる背景を持つ人たちが、一つの祭の準備や実行を通して出身地や居住地、職業や社会的地位、

年齢、性別などから生じる差異を乗り越え団結して動いていく。そしてそのようなつながりと結束の接続点には、すでに若者を経験し、そしてこれから長老を経験することになる中間的な存在のおじさんならではの奉仕精神と貢献のあることを強調しておきたい。おじさんたちの力は日常の生業の場だけではなく、あるいは日常では見えにくくても、多様かつ持続可能な形で発揮される可能性を秘めているといえるのである。

さらには、この「なかだち」であるおじさんたちという中間地点がいることによって、祭を裏で、昨今では表でも支えている女性たちの力が鮮やかになってくる。祭を担うおじさんたちを支えているのは、他ならぬ女性たちであり、その力なくして祭は決して成功しない。オルデンバーグはサードプレイスという「中立の領域」は「コミュニティ・ライフに極めて重要な、とびきりの付き合いやすさを提供する」[オルデンバーグ 1989: 19]としている。それはまた、「一番古い世代が一番若い世代と交流する手段を提供する」[オルデンバーグ 1989: 23]場であるとも述べている。日本の祭にサードプレイス同様の中間地点としての意義を認められるとすれば、一面ではそれは日本の祭を中核的に担い続けるおじさんたちこと、中年層の男性たち独特な存在と貢献によるところが大きいともいえるだろう。

5. 災害や非常事態とインフォーマルなつながりにみる共助システム

以上、ここまでサードプレイスの特徴と、日本における祭と祭を通して育まれるつながりとの共通点から見えてきたその重要な役割をみてきた。ここからは、それらサードプレイスの特徴と祭や祭を通じたつながりが社会でもたらす有用性について、いくつかの点から探っていきたい。

サードプレイスには大きく8つの特徴があり、これらは第1の場所である家庭や、第2の場所である職場には代替されがたい機能と役割を果たしている。他の施設や場所でもその機能をいくつか有しているものはたくさん認められるが、ある1つの場所においてこれら8つのすべてを満たす場所となると皆無に等しい。それだけ、いかにサードプレイスの果た

す機能と役割が地域社会や現代社会にとって不可欠で代えがたいものであるかがうかがい知れる。アメリカの社会学者であるオルデンバーグは、アメリカ社会におけるインフォーマルな公共生活の喪失がもたらす不利益と問題をいち早く感じ取り、サードプレイスの重要性を説いたのであった。日本社会においてもサードプレイスの各特徴は非常に重要だといえ、特にこれらを満たす日本版サードプレイスの創出と地域創成がセットで論じられ、取り組まれている事例は多い。先に取り上げた政策学者の石山恒貴や、サードプレイスによるまちづくりを手掛ける国分裕正もそのような取り組みを実施してきた人物である。東日本大震災後の気仙沼のある地域の復興を手掛けた国分は、「100年後を見据えた街づくり」[国分 2019 : 46]をしなければならぬと述べている。そして今の日本に求められるのは、垣根を取り払い、ともに生活し、ともに学び、ともに幸せになる、つながりのある街づくりであるともいう。地域との接続を重視する石山は、多世代交流やつながり方の多様さについて触れ、特に「ゆるいつながり」ということを論じている。そのような多様で柔軟な人と人とのつながり方が認められることで、「結果として地域が好きになる」[石山 2020 : 253]というのが石山の主張であった。

オルデンバーグはまた、サードプレイスでのインフォーマルな公共生活やつながり方に重点を置いている。日本の祭に関していうと、インフォーマルとフォーマルなつながりは連続していることも多く、これは古来、日本社会の最重要産業であり続けてきた稲作から祭という文化が発生してきたことにも起因しているといえよう。都市祭礼は必ずしもこの限りではないが、経済的な資本としての祭と捉えると、祭を通じた人や社会とのつながりがインフォーマルとフォーマルの接合を見せるということもいえるだろう。世界文化遺産となった京都祇園祭のような大きな祭であっても、祭を中心的に担う人たちは、京都市中で古くから商いをしてきた家も多く、祭を担う側にはやはりインフォーマルとフォーマルのつながりが接続しているケースが多いといえる。

サードプレイスであっても日本の祭であっても、このような日常や第 1、第 2 の場所とは異なる空間

や集まりの中で培われた人や社会の間のつながりが「絆」とも呼ばれる「社会関係資本」[稲葉 2016 : 20]として機能する要素には次のようなものが挙げられる。

日本の祭は文化資本、経済的な資本であると同時に、稲葉陽二によれば社会関係資本とみなすことも可能である。人や社会の間にある「絆」といわれる「社会関係資本」には、実に多くの効用が認められる。祭に関して言うと、祭の文化資本としての要素を、祭が持つ社会関係資本の人的な要素が支え、社会関係資本としての祭を文化資本としての祭が強固になるという「相互作用」[稲葉 2016 : 39]が認められるとしている。また山田浩之は京都祇園祭の持続可能性に関して、その継承と維持には多くの課題や困難がつきまとうが、京都祇園祭ではボランティアという「共助」が祭の運営システムに組み込まれることが大事であり、またそのような「共助によって祇園祭は支えられている」[山田 2014 : 169-177]とも論じている。このことは祇園祭という祭そのものが共助という仕組みに大きく支えられてはじめて成立するというを示している。この共助、助け合いという要素は、コロナ禍を迎えた今こそ社会に必要とされるものであることを第 1 節でも触れたが、水津陽子はさらにこのような助け合いや共助は理想やニーズとしては確認されるが、多くの人が実際にそれを体感したり実感できる場を持ってないでいる、という実情を述べている[水津 2020 : 18]。稲葉は、だんじり祭という祭を通して人々の間に絆のできている岸和田市は、例えば震災などの被害に見舞われた場合、その復興が一番早いのでは、という作家藤本義一氏の談話を掲載している[稲葉 2016 : 35]。先に挙げた水津は、いざというときに助け合える人とのつながりや地域の絆のあるコミュニティが「共助コミュニティ」であり、地域に限らず趣味や SNS など多様な形態の中から自分が「居心地がよくて楽しい場所」[水津 2020 : 140]を探して参加するよう提案する。居心地がよくて楽しい場所は、そこに継続的に参加するよう促し、参加する他のメンバーとの助け合いを躊躇させないであろう。また共助システムは、サードプレイスでは「中間準備地」[オルデンバーグ 1986 : 20]としての機能を果たす中でその役割も果た

しうる。地元が危機に陥った時、サードプレイスに集まる人たちがそこで情報を共有し、自助努力で災難を切り抜けようとする拠点になる。

祭やサードプレイスにおいては、普段の日常とは異なるようなインフォーマルなつながりの存在が前提とされる。ただ祭の場合はフォーマルなつながりと接続していることも多いがこのようなインフォーマルなつながりは、原則的には自発的で自ら選択したものであり、平等化や中立性の保証のもとに構築される。それらの特徴によって、いっそう持続的なつながりをもたらされるとされる。このように自発的かつ持続的なつながりであるからこそ、災害や緊急事態などの危機的状況にも早急に対応することが可能であり、柔軟で包括的な支援や助け合いを提供することができる。また祭の例からみると、共助システムがいかにか祭の運営と成功、継承に作用しているかを読み取ることができるだろう。都市化が進み、孤立しやすく希薄化した人間関係を余儀なくされることの多い現代社会では特に、このようなインフォーマルでありながら自発的なつながりが生む共助システム、すなわち絆という社会関係資本の計り知れない有用性がある。

6.現代社会とサードプレイスとしての日本の祭の重要性

祭に認められる社会関係資本、すなわち人や社会との間の絆は、祭を通じたつながりが育むものであり、このような絆は共助という助け合い方でもあることをみてきた。また同様に、サードプレイスはそのに集う人々の中立的で平等化の担保された人間関係の構築によって、いざというときに上述したような共助のあり方がもたらされる「中間準備地」でもあることを見て取ることができた。このような共助システムや社会関係資本という絆は、災害時や緊急事態においては欠かすことのできない重要な人的資本である点も認められよう。ここではさらに、サードプレイスとしての日本における祭、あるいは祭を通じたつながりの現代的な重要性と意義について考察を試みる。

オルデンバーグはアメリカ社会における、サードプレイスという第3の場の重要性を唱えた。彼は、

公共生活を切望する者たちにはその選択肢がないとも説いている。オルデンバーグのいうサードプレイスとは「インフォーマルな公共生活の中核的環境」、つまり家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的に自発的なインフォーマルな、お楽しみの集いのために場を提供する、さまざまな公共の場所であるとされる。サードプレイスの8つの特徴は、現代社会の生み出した闇や問題をそのまま反映し、解決させるための手掛かりを与える要素になっていると思われる。あるいは、第1の場である家庭や、第2の場である職場では生活や生存に第一義的に不可欠な要素が揃っているが、それらだけでもまた生存の適わない人間にとって、第3の場所の特徴が提供する要素を取り入れることでバランスを保ち、よりよい生活や人生を営んでいくことができるとも考えられる。

現代社会では人や社会の間のつながりが希薄化し、かつてコミュニティに自然に存在していた共助につながるような絆を実感できる時間も場所も少なくなっている。一方で、コミュニケーションツールは多様化し、人と人との関わり方や交流の場所も様変わりしている。にもかかわらずコミュニケーション能力自体は低下し[松下2010:67]、その一方で人々は「心の底では人や社会との間のつながりを求めてやまない」[国分2019:219]ともいわれている⁷⁾。

祭もまた然りである。地方の地域コミュニティの中で、多世代が同じ時期と空間を共有し、生業を受け継ぎ営んできた時代から、生活のために都市部へ移動する人口が増加して、地方も都市部も人口の構成が大きく様変わりした。地方は高齢化や過疎化という深刻な問題を抱えるようになり、若者や生産年齢人口が集積する都市では、新たな地域コミュニティのあり方や課題に向き合うことになった。伝統文化としての祭の多くは、その価値が見直される中で維持と継承の問題に直面しながら続けられている。様々な「祭」や「フェスティバル」を冠するイベントも作り出され、地域の活性や観光開発に尽力している。都市部では、このようなイベント性の強い祭と古くからの祭が共存し、それぞれの意義と価値、役割を以て人々の生活に溶け込んでいるといえるだろう。

サードプレイスと共通する特徴を発揮しうる祭と

いう観点からみると、イベント性の高い新しい祭も、農耕儀礼に端を発する古くから続いてきたその土地ならではの祭も、役割と意義の面では大きな違いはないだろう。他の施設や場所では代替できないサードプレイスの8つの特徴、つまり1 中立性、2 社会的平等性の担保、3 会話が中心に存在すること、4 利便性があること、5 常連の存在、6 目立たないこと、7 遊び心があること、8 感情の共有ができるもう1つの我が家、という特徴と機能は新旧どちらの祭であっても方法次第で発揮しうると思われる。他方で、イベントと祭の大きな違いは何かというと、その継続性があげられる。新規のイベントは、1 回限りに終わってしまうことが多いのに対し、古くから地域やコミュニティで営まれてきた祭は農耕儀礼や信仰という中核と目的に支えられていることから、独自の形式をもって、また世代間の伝承を果たしながら、住民や参加者が強い意識で継続させているものが多い。祭は大きくなるほど費用も人手も必要になることから、維持と継承の問題が必ず生じてくる。しかしそれでも、地域住民を中心とする祭の参加者の継続の意思はより一層強くなるようである。

筆者がフィールド調査を実施した福島県の「田島祇園祭」では、祭の担い手の若者は町の外に暮らしている者も多く、祭の時期にどうにか都合をつけて帰ってくる人も少なくない。現在60代後半で、若い時には今の若者と同様に町以外で生活をし、引退後にUターンしてきた男性は、「今までできなかった分を恩返しする気持ちで祭に奉仕したい」と話した⁸。この男性も、同世代でずっと町にとどまって暮らしてきた男性も、どちらも「次の世代に祭を受け継ぎ、それを途絶えさせない」ことが自分たちの役割だと考えているという趣旨のことを異口同音に語っていた⁹。一方、祭を受け継ぐ若者も、「自分たちがやらずに誰がやる」という意識をもって加わっていたり、先代と同じ様に「次の世代へバトンリレーを行なうのが大事なことだと考えている」とも述べていた¹⁰。祭を取り仕切る地元の田出宇賀神社の宮司も、今回のコロナ禍を受けて、祭を縮小せざるを得ない状況下で、「これまでもさまざまな厄災から立ち上がってきた祭と住民であるから、その点はあまり心配していないが、大切なのは次の世代へ祭の継承が途切れ

ないようにすること」だと話していた¹¹。

未知なる感染症の世界的な感染拡大という事態を受けて、日本の祭も様々なイベントも、世界中の祭やイベントも、中止や規模縮小を余儀なくされた。そのような状況で、古くから続けられてきた祭のあり方や意義も見直されることになった。社会学者の小松和彦は、産業が生み出す公害、陰湿ないじめや過労など、数多の社会問題に直面し、自分探しに腐心する「現代都市市民こそが、神の信仰に根差した古い祭を求めてやまない」[小松 1997 : 37-38]と論じている。新型コロナウイルスの感染が拡大し、感染防止対策が取られる中で、ご神事だけは少数の人間で行おうとした祭が多かったことから、現代にあってもなお日本社会の人たちが祭と神をいかに大事に考えているかがうかがい知れるのではないだろうか。

日本の祭に継続性があるとすれば、神への信仰の存在と多世代の交流がその鍵になりそうである。そしてそのような祭は、人や社会との間のつながりを育むというサードプレイスの機能を果たすことになる。それはとりもなおさず、現代社会に薄くなりつつあったとしても実は人々が根底で求めている人と人とのつながりや絆という社会関係資本を醸成する装置として祭は重要な側面も有していることを意味する。

オルデンバーグのいうサードプレイスは、様々な独自の特徴から人を元気にすることができる「心の強壯剤」[オルデンバーグ 1986 : 116]となる場所であった。その要因は、誰にでも門戸を開き、中立性の中で社会的平等を確保し、古い世代と若い世代が交流し、一緒に楽しめる、定期的で自発的な人間関係が維持されるということ、そして何より感情を共有し、ともに交流を楽しむことをお互いの目的として、訪れることができる空間であることであった。このような場所は海外であっても日本であっても、決して容易な場所ではないかもしれない。しかし、驚くべきことには日本の祭にはその利点の多くが共有されているのであった。古くから地域やコミュニティに根差してきた日本の祭と祭を通して培われる人や社会との間のつながりが、現代社会にこそ必要なサードプレイスとしての機能と役割を果たしうる点を見直してみてもよいと思う。

7.結語—インフォーマルで柔軟なつながり方とコミュニケーションの基盤の意義

最後に、サードプレイスと日本の祭に認められる重要な共通点である、インフォーマルで柔軟なつながり方とコミュニケーションの醸成、という視点からサードプレイスと日本の祭の意義を総括する。

現代においては人間関係、あるいは災害時や緊急事態の際しての共助という意味でも、人と人、人と社会の間のつながりが求められ、必要不可欠である。折しも新型コロナウイルスによる世界的な感染拡大という事態に見舞われた社会では、この人と人との間のつながり、人と社会の間のつながりが一層望まれる。それにもかかわらず、そのつながりやつながりを基にした絆や共助を実感できることは少ない。オルデンバーグがサードプレイスという概念を提唱した1980年代は、アメリカ社会における公共生活の喪失から生じる社会的課題への警鐘が鳴る時代であった。

サードプレイスの意義や価値を認め、日本各地でもサードプレイス作りやそのつながりを街づくり、地域活性化に役立てようとする取り組みが増えていることはすでに述べたとおりである。その効果は、災害や緊急時にはより明確になる。多様な人々が集って交流する場としてのサードプレイスの目的から、サードプレイスで育んだ人間関係やつながりをきっかけに災害、非常時のボランティア活動や地域活性のための活動など、共助や助け合いを実践しようという動きも認められる。実際に日本の祭では、コロナ禍を受けて困難を極める祭の実施に向けて、すでにあるつながりを基盤に、感染症対策の制約のもとに祭を新たな形で実施する、あるいは災害に見舞われた後に祭を市民や参加者たちの手で復興させるという例が多かった。

現代社会では希薄な人間関係に起因する孤立化といった社会問題、あるいは地域を問わず世界的な感染拡大を見せる新たな感染症の流行と、それにまつわる差別や医療崩壊の問題などに直面している。サードプレイスとしての祭や、祭を通じたつながりの何がそれらの問題に効果を発揮するかといえば、それは格差や差別を越える可能性をもつインフォーマルで柔軟なつながり方の醸成にあるといえないだろうか。それらは、具体的にはサードプレイスの8つ

の特徴が成立させる、多世代間の交流であるとか心の強壮剤という機能、利他主義と利己主義の融合などの効能があげられる。その中心でこれらの意義を支えるのは平等性にもとづく「対等な受け入れを提供する場」という1点に集約されるのではないだろうか。第1の場所である家庭にも、第2の場所である職場にもそれぞれ不可欠の意義と役割がある。そしてそれらはすべて人間にとって社会生活を送る上で必須のものである。だからこそ、これらを生み出した社会生活の狭間あるいは外で、社会生活を補完するような第3の場所であるサードプレイスとその機能が重要な役割を果たすことが可能になる。サードプレイスを作り、通うのも、祭を担い、祭を楽しむ、つながりを求めるのも人間である。そしてそこで楽しみ、友情とぬくもりをもって支え合うときに、人々の間で格差や差別が生じることは少ないだろう。病やストレス、社会問題にさらされて生きているのもまた同じ人間である。私たち現代社会に生きる者は、現代社会の課題を背負って生きていく他はない。それぞれの時代に、それぞれの時代の課題と問題があり、その時々社会と人は向き合ってきた。その時々課題と社会問題を解決し、乗り越えてきたのもまた、現代に生きる私たちと同じ人間であった。現代のように優れたツールもなかった社会で、人々は時代が生み出す難題と向き合ってきたのだった。

現代的な社会生活を優先させ、世界の先頭を走り続けることになったアメリカ社会では、公共生活の喪失が生み出す闇もまた問題化していた。その課題に眼を向けたオルデンバーグが鳴らしたサードプレイスという警鐘は、日本の古くから続いてきた祭のあり方にも通じることが多かった。サードプレイスという場のあり方は、人と人との交流による格差や差別の乗り越え方を教えている。日本の祭と祭を支える人と人とのつながりもまた、はじめから人のある差異や「距離を縮めたところ」[稲葉 2016 : 245]から開始され、地域を超えて祭という共有の文化を通してその「つながりと絆を醸成し深める」[稲葉 2016 : 40]ものである。現在の祭は、「地域の枠を超えた多様な人々に開かれつつある」[小西 2018 : 139]ともいわれている。多様な人々を受け入れる素地を有し、違いや格差を越えた交流と柔軟なつながり、

絆を育む日本の祭は、サードプレイスとしてもその役割を果たしうる。そしてそれは現代の諸問題に対し、人や社会の間のつながりと絆で乗り越えるための方法の一つを提示しているといえよう。

註：

¹ 本稿では「なかだち」とは、コミュニケーションをなかだちする「媒介」(メディア)という意味で用いている。「なかだち」は「媒」とも表記され、情報の伝達と感情や思想の共有といった「媒介」作用を含む手段の一種と捉えられる。(参考：水越伸 (2014)『21世紀メディア論』放送大学教育振興会、pp18.)

² 日本文化人類学会、日本学術会議公開シンポジウム「With コロナの時代に考える人間のちがいと差別～人類学からの提言～」2020年10月11日オンライン開催

³ 日本文化人類学会、日本学術会議公開シンポジウム、同上

⁴ 稲葉陽二は、人と人の中にある「絆」は「ソーシャル・キャピタル」といわれるとする。1993年、アメリカの政治学者であるロバート・パットナムが「ソーシャル・キャピタル＝社会関係資本」を「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」と定義した。この「絆」であるところの「ソーシャル・キャピタル」がいうネットワークについて、パットナムはネットワークとそこに醸成される信頼と規範として加えて、稲葉は社会全般に対する信頼と規範も含めて定義する、としている。(参考：稲葉陽二 (2016)「都市祭礼とソーシャル・キャピタル」)

⁵ 現代では年齢的に若者と年配者の中間の層であったとしても、歴史的に壮年の年齢はすでに隠居や長老の年齢層になることもある。そのため本稿では現代的な意味合いに従い、昨今、日本文化の1つとしても注目されるといわれる中間層の年齢の男性たちを指して、「おじさんたち」という表記を用いるものとする。

⁶ 筆者フィールド調査：田島祇園祭にて2017年、2018年、2019年の各7月と、2020年1～12月の期間にかけて実施

⁷ 国分裕正は、孤独を求めている人も、心のどこかで他人とのつながりを求めており、非リアルなコミュニケーションが主流の現代こそ、人と人がリアルにつながる場所が必要である、としている。国分は人が集まれるそのような代表的な場所をサードプレイスだと捉えている。(参考：国分裕正 (2019)『人が集まる場所を作る—サードプレイスと街の再生』)

⁸ 筆者聴き取り調査：2020年田島祇園祭「お覚屋御千度」の準備にて2020年1月実施

⁹ 筆者聴き取り調査、筆者フィールド調査：田島祇園

祭にて2017年、2018年、2019年の各7月と、2020年1～12月の期間にかけて実施

¹⁰ 筆者聴き取り調査、同上

¹¹ 筆者聴き取り調査、田出宇賀神社にて2020年6月実施

引用文献：

- レイ・オルデンバーグ (1989)『The great good place』
忠平美幸訳 (2013)『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』、みすず書房
稲葉陽二 (2016)「都市祭礼とソーシャル・キャピタル」
山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える』、ミネルヴァ書房
石山恒貴編著 (2019)『地域とゆるくつながろう』、静岡新聞社
倉林正司 (1975)『祭の構造—共演と神事』、日本放送出版協会
倉林正司 (1980)『日本の祭・心と形』、主婦の友社
国分裕正 (2019)『人が集まる場所をつくる—サードプレイスと街の再生』、白夜書房
小西賢吾 (2018)「「あつまり」と「つながり」としての祭り—コミュニティの維持・再生につながる力」
山田孝子・小西賢吾編『祭りから読み解く世界』、英明企画編集
小松和彦 (1997)「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編著『祭とイベント』、小学館
水津陽子 (2020)『令和・アフターコロナの自治会・町内会運営ガイドブック』、実業之日本社
原田信夫 (2006)『コメを選んだ日本の歴史』、文芸春秋社
松下彰信 (2010)「祭の原点と意義」『日本の祭りについての社会学的研究』、香川大学教育学部篇『香川大学研究報告第1部134号』、香川大学教育学部
柳田國男 (1942)「日本の祭」『定本柳田國男集第十巻』(初出：『日本の祭』、弘文堂書房)、筑摩書房
山田浩之 (2014)「無形文化遺産・京都祇園祭の持続可能性について」『文化政策研究』編集委員会『文化政策研究第7号2013』、日本文化政策学会

(Received: January 24, 2021)

(Issued in internet Edition: February 6, 2021)